

「創造的な学び」を展開する道徳教育の在り方

追立直也 [鹿児島大学教育学部附属中学校]

前之園礼央 [鹿児島大学教育学部附属中学校]

山口隼人 [鹿児島大学教育学部附属中学校]

榊隼弥 [鹿児島大学教育学部附属中学校]

Research on moral education with “creative learning” in the Junior High School

OITATE Naoya・MAENOSONO Reo・YAMAGUCHI Hayato・SAKAKI Junya

キーワード：道徳科、問題解決的な道徳の時間、能動性、独自性、立場カード

1. 主題との関わり

1.1. 社会の情勢より

昨今のグローバル化は、知識や人材をめぐる国際競争を加速させるとともに、製造業等の海外移転に伴う国内雇用に大きな変化をもたらしたり、異なる文化との共存や国際協力の必要性を増大させたりしている。また、今後グローバル化が進展すればするほど、様々な文化や多様な価値観を背景とする人々と相互に尊重し合いながら生きることや、科学技術の発展や社会・経済の変化の中で、人間の幸福と社会の発展の調和的な実現を図ることがますます重要な課題になると考えられる。このような課題に対応していくためには、社会を構成する主体である一人一人が、人としての生き方や社会の在り方について、多様な価値観の存在を認識しつつ、自ら感じ、考え、他者と対話し、協働しながら、よりよい方向をめざす資質・能力を備えることがこれまで以上に求められる。このような資質・能力の育成において大きな役割を果たすのが、道徳教育である。また、道徳教育を通じて育成される道徳性、とりわけ内省しつつ物事の本質を考える力や何事にも主体性をもって誠実に向き合う意志や態度、豊かな情操は、「豊かな心」だけでなく「生きる力」を構成する「確かな学力」や「健やかな体」の育成の基盤となるものであると考える。

このように、道徳教育が重要視される中で、平成26年3月から中央教育審議会の審議を経て、「道徳に係る教育課程の改善等について」という答申が出された。この答申では、道徳の時間を「特別の教科 道徳」（以下道徳科とする）として位置付けることをはじめとした7つの基本的な考え方が、道徳教育についての学習指導要領の改善の方向性として示された。

今回の改訂により、いじめ問題への対応が示されるなど、発達の段階をより一層踏まえて、体系的なものにする観点からの内容の改善や、問題解決的な学習を取り入れるなどの指導方法の工夫が示されている。これらのことは、「多様な価値観の、時には対立がある場合を含めて、誠実にそれらの価値に向き合い、道徳としての問題を考え続ける姿勢こそ道徳教育で養うべき基本的

な資質である」との答申を踏まえ、今後は、発達の段階に応じ、答えが一つではない道徳的な課題を生徒一人一人が自らの問題と捉え解決していく必要があることを表している。また、そのような自らの問題を解決していく力を育てるために道徳科の目標には、「よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うため、道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を広い視野から多面的・多角的に考え、人間としての生き方についての考えを深める学習を通して、道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てる」とある。つまり、道徳科として、教科化された道徳の時間では、道徳的価値について自分との関わりも含めて内省し、他者の考えと自分の考えを比較しながら自らの経験などを組み合わせて新たな価値を生み出していくといった「考える道徳」、「議論する道徳」への転換が図られていくことになる。

1.2. 道徳科における「創造的な学び」とは

本校では、平成24年度から、授業の中で、手がかりを見いだしたり、考えを拡げたり、よりよいものへとまとめたりしながら、よりよく問題解決を図っていくことを目的として、創造的に考える力や創造的に考えようとする態度を育成する研究を進めてきた。平成25年度からの2年間は、創造的に考える力を育成していくために、これまで研究を行ってきた創造的な活動に協働の視点を加えた協働による創造的な活動を行った。さらに、平成27年度から、生徒が「能動性」や「独自性」を発揮しながら行う創造的な活動を、「創造的な学び」として位置付け、その指導の在り方について研究を行っている。

一方、新設される道徳科においては、自分自身の価値観を形成していくために、道徳的価値について自分で問題を発見し、納得いくまで考え、深く理解すること、そして、これまでの自分を見つめ直し、新たな自己を確立していくことが重要になってくる。なぜなら、この達成のためには、自分の考えを基に話し合ったり、互いに議論したりする主体的な学び・協働的な学びが不可欠である。つまり、道徳科の授業においても本校の実践してきた主体的・協働的な学びを進めていくことによって、生徒が「能動性」や「独自性」を一層発揮し、創造的な学びを展開することができると思う。

2.1. 道徳科において能動性を発揮するためには

本校では、能動性を発揮している生徒の姿を、『現状』が『あるべき姿』になることを阻んでいる要因を把握し、それを解決するために自ら課題を設定し、解決していくことができる生徒（平成28年度附属中学校緒論）と捉えている。

従来の道徳では、主人公の心情を追いながら、場面ごとの登場人物の思いを考え、振り返り、ねらいに達するといった授業展開が大切にされてきた。しかし、このような授業展開では、資料の登場人物の思いなどを通して主題となるねらいに達することはできても、自らの問題として考えたり、他者と話し合っただけで新たな解決方法を導き出したりする自覚化の面で課題が残った。そこで、資料の中から生徒自身に関連する問題や道徳的価値を発見し、自らの問題として考え、議論

し、話し合い、よりよい問題の解決に達するといった問題解決的な道徳の時間を展開することによって、能動性を発揮させていきたいと考える。

つまり、本校がめざす道徳科における問題解決的な学習とは、生徒が生きる上で出会う様々な道徳上の問題や課題を多面的・多角的に考え、主体的に判断、実行しようとし、よりよく生きていくための資質・能力を養う学習である。ただし、生徒一人一人が抱える道徳上の問題は、これまでの生育環境や性格などの違いにより多様である。そこで、問題解決的な道徳の時間を設定することによって、生徒は、教師が設定した主題について、自ら課題を設定し、道徳的諸価値についての理解を基に、他者との比較や対話などを通して自己を見つめ、人間としての生き方について深く考え、適切な行為を主体的に選択し、実践しようとする実践的意欲や態度を育むことにつながると考える。このことは能動性を発揮している生徒の姿である『『現状』が『あるべき姿』になることを阻んでいる要因を把握し、それを解決するために自ら課題を設定し、解決していくことができる生徒』の育成にもつながっていくと考えた。

2.2. 道徳科において独自性を発揮するためには

本校では独自性を発揮している生徒の姿を、「新しい考えやものを創り出すために、他のアイデアとの比較も考慮しながら、自分の知識・技能や経験を組み合わせ、新たな価値をもったアイデアを出すことができる生徒」（平成28年度緒論）と捉えている。

道徳の時間において、生徒は、道徳的価値について自分との関わりも含めて理解し、それに基づいて内省し、多面的・多角的に考え判断する能力、道徳的心情、道徳的行為を行うための意欲や態度を身に付けていく。そして、その内省する時間において、自らのこれまでの考えを振り返ったり、他教科で学習した内容と道徳的価値とを関連付けて考えたりすることが求められる。つまり、内省し、道徳的価値について考える際に、他教科の学習を想起させるような課題や状況を設定することによって、物事を多面的・多角的に考え、判断することができるようになると思う。

また、集団で考え、議論する際に、様々な立場に立った上で考え、議論させる場面を設定することによって、自分一人では気付くことができない新たな視点が加わり、他者との比較を通して新たな見方・考え方ができるようになると考える。これらの手立てを継続していくことによって、独自性を発揮している生徒の姿である「他のアイデアとの比較も考慮しながら、自分の知識・技能や経験を組み合わせ、新たな価値をもったアイデアを出すことができる生徒」を育成していきたい。

2.3. 道徳科における評価と、創造的に考える力や態度の評価とは

道徳科の評価の具体的な在り方については、平成27年度に文部科学省において、以下のよう

- ・ 数値による評価ではなく、記述式であること。
- ・ 他の生徒との比較による相対評価ではなく、生徒がいかにか成長したかを積極的に受け止め励

まず個人内評価として行うこと。

- ・ 他の生徒と比較して優劣を決めるような評価はなじまないことに留意する必要があること。
- ・ 個々の内容項目毎ではなく、大きくくりなまとまりを踏まえた評価を行うこと。
- ・ 発達障害等の生徒についての配慮すべき観点等を学校や教員間で共有すること。
- ・ 現在の学習指導要領の書式における「総合的な学習の時間」、「特別活動の記録」、「行動の記録」及び「総合所見及び指導上参考となる諸事項」などの既存の欄を含めて、その在り方を総合的に見直すこと。

各学校においては、これらに基づき適切に評価を行うことが求められる。また、道徳科の目標の中には「よりよく生きるための基盤となる道徳性を養う」とある。この道徳性とは、平成27年7月に示された中学校学習指導要領解説特別の教科道徳編において、以下のように示されている。

人間としての本来的な在り方やよりよい生き方をめざしてなされる道徳的行為を可能にする人格的特性であり、人格の基盤をなすものである。それはまた、人間らしいよさであり、道徳的価値が一人一人の内面において統合されたものであり、「道徳的判断力」「道徳的心情」「道徳の実践意欲と態度」を構成の諸様相とする内面的資質である。

このような道徳性を培っていくためには、まず、教師自身が授業を通して、道徳的価値について生徒がどのように、あるいは、どの程度の理解を深めているかを評価し、その評価に基づき指導方法の改善（フィードバック）を図るといった教師側のアプローチが必要となる。また、生徒自身も、これまでよりもよりよく生きようとする時間が必要になる。これは、自己を振り返る内省の時間であり、道徳科の授業においては、自己評価の場面に当たると考えられる。自己評価において、生徒はこれまで自分が道徳的価値についてどのように考えていたのかをワークシートに記入することで振り返り、よりよく生きるための新たな価値観を形成していく。その際に生徒の価値観がどの程度深まっているかを計る尺度となる物差しを設定することによって、生徒の道徳性に係る変容を見取ることができると考える。ただ、数値による評価を行わないという観点から、「何がどれだけできている」という量的な表現で見取るのではなく、「どの程度まで表現できるか、表現しようとしているか」という質的な表現で見取ることには留意しなければならない。

本校では昨年度より創造的に考える力や考えようとする態度を見取るために、各教科においてICEモデルを用いたループリックを設定した。そのようにすることによって、生徒のパフォーマンスを質的な表現で段階的に区切り、その到達段階で創造的に考える力や考えようとする態度を見取ることが可能としてきた。そこで、道徳科における創造的に考える力や考えようとする態度を段階的に見取る手立てを講じ、生徒の道徳性をよりよく育成する指導と評価を一体化していくことで、生徒の道徳性がより着実に養われていくものとする。

3.1. 「能動性」を発揮させるための道徳科における問題解決的な学習の工夫

平成27年に示された中学校学習指導要領解説特別の教科道徳編における道徳科の目標には、

「よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うため、道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を広い視野から多面的・多角的に考え、人間としての生き方についての考えを深める学習を通して、道徳的判断力、心情、実践意欲を育てる」とある。この目標は、平成26年に出された中央教育審議会道徳部会の答申が基となっており、その答申には、「一人一人が生きる上で出会う様々な問題や課題を主体的に解決し、よりよく生きていくための資質・能力を養うこと」と明記されている。つまり、道徳科で育むべき「資質・能力」とされる道徳的判断力、道徳的心情、道徳の実践意欲・態度は、生徒自身が道徳的問題を客観的かつ論理的に考え、問題の当事者の心情にも配慮しながら、望ましい解決策を具体的に構想し、吟味し合う問題解決的な学習によって養われると考える。そこで、本校では、能動性を発揮している生徒の姿である『自ら課題を設定し、解決していくことができる生徒』をめざして、道徳科においても問題解決的な学習を充実させられるように、学習指導過程、発問の研究を進めていくことにした。

3.2. 「能動性」を発揮させるための問題解決的な学習の学習指導過程の工夫

これまで本校では、平成21年度の「自己を発揮し、未来を拓く生徒の育成～『他とよりよい関係を築く力』をはぐくむ指導～」という主題における研究を基にして道徳の指導を行ってきた。平成21年度の研究で作成した学習指導過程は、導入を「意識化」、展開を「焦点化」、「価値の追究」、「自覚化」、終末を「意欲化」の5つの過程に分け指導を行ってきた。具体的には、自己内対話を活性化させる工夫として、生徒の実態に応じた資料を準備するとともに、生徒が心から感動できるような魅力的な資料の開発をしたり、自己決定を促して、その結果や根拠が他者と対立するような場を設定したり、資料の内容との関わりにおいては、生徒の認識や前提を揺さぶるような補助教材、発問を工夫するなどの手立てを講じたりしてきた。また、価値の追究の過程において焦点化した問題点を追究する段階では、多様な意見や考え方を表出させるとともに、建設的な話し合いを行うことができるように、グループ討議から全体討議へ移るといった手立てを講じ、話し合いが活性化する工夫を行ってきた。

このような平成21年度の研究を基盤にしつつ、本年度は、以下の2つの学習指導過程を意識することで、より問題解決的な学習が深まるように改善を行った。

今回開発した学習指導過程1は、従来のように主人公の心情を追いながら、場面ごとの登場人物の思いを考え、振り返り、ねらいに達するという授業展開を踏襲しながらも、主人公だけでなく、様々な登場人物や問題となる行動に関わる人の立場に立って、多面的・多角的に考えさせることを目的としている。そのため、手立てとして立場カードの導入や価値葛藤が起こるモラルジレンマ資料の活用が挙げられる。以下、表1に具体的な展開例を示す。

【表1 問題解決的な道徳の学習指導過程1】

過程		基本的な内容
導入	意識化	<ul style="list-style-type: none"> ○ 課題に対する意識化を図り、ねらいとする道徳的価値への方向付けを行う段階 ○ 自己課題を設定する段階 <ul style="list-style-type: none"> ・ アンケート結果, 写真, VTRなどから, 疑問や問題意識等を生じさせ, 本時の学習への動機付けを図り, 自己課題を設定させ資料へ導く。
	道徳的問題の把握	<ul style="list-style-type: none"> ○ 自発的な興味と関心呼び起こし, 道徳的問題を把握する段階 <ul style="list-style-type: none"> ・ 資料を読み, 冷静で客観的な観察力によって現実的な問題状況を正確に見極め解決すべき課題を見つけさせる。 ・ 問題点が複数ある場合には, 追究の順番を決めたり重点化させたりする。
展開	道徳的問題の解決	<ul style="list-style-type: none"> ○ 道徳的問題を解決するための解決策を出し, 吟味する段階 <ul style="list-style-type: none"> ・ 解決策を自由に構想させ, 主人公はどうしたらよいか, 自分ならどうするかなど, 様々な可能性も踏まえて, 多面的・多角的に考えさせる。 ・ グループ討議において, 解決策と理由について討議をさせ, 解決策の結果などについて議論させる。
	考え議論する	<ul style="list-style-type: none"> ○ 立場カード(詳細はP511で説明)を用い, 多面的・多角的に考える段階 <ul style="list-style-type: none"> ・ 問題となる行動に関わる様々な人の立場で考えさせ, 再度解決策を吟味させる。 ○ 学級全体で解決策について考え・議論する段階 <ul style="list-style-type: none"> ・ グループでの解決策を発表するとともに, 他のグループの解決策を聞いて, 比較検討することによって, 学級全体でよりよい解決策を考え・議論させる。
終末	つなげる	<ul style="list-style-type: none"> ○ 各教科や特別活動などとの関連を図り, 生徒一人一人が, 自らの道徳的な成長や明日への課題などを実感して確かめることができる段階 <ul style="list-style-type: none"> ・ 教師が説話を行うことで, 生徒にねらいの根底にある道徳的価値をより主体的に考えさせる。 ・ 授業で考えた道徳的価値について自分との関わりも含めて内省させ, 他者の考えと比較させながら自らの経験などを組み合わせさせ, 新たな道徳的価値を振り返りシートに記入させる。

次に、学習指導過程2は、展開前半で資料の読み取りを通して道徳的価値を把握させ、展開後半では、生徒により身近で現実的な問題を取り扱って、議論を行わせる展開となる。ただ、指導上の留意点としては、生徒指導上の問題で単にルールを決めさせるのではなく、展開前半の道徳的価値と関連付けたり、立場カードを用いて多様な意見を共有化させたりしながら、結論を得ていくことが望ましい。また、展開前半で用いた資料で把握させた価値と、議論を通して深めようとする価値が乖離しないよう、価値の焦点化を図ることが大切である。以下、表2に具体的な展開例を示す。

【表2 問題解決的な道徳の学習指導過程2】

過程		基本的な内容
導入	意識化	<ul style="list-style-type: none"> ○ 課題に対する意識化を図り、ねらいとする道徳的価値への方向付けを行う段階 ○ 自己課題を設定する段階 <ul style="list-style-type: none"> ・ アンケート結果, 写真, VTRなどから, 疑問や問題意識等を生じさせ, 本時の学習への動機付けを図り, 自己課題を設定させ資料へ導く。
	道徳的価値の把握	<ul style="list-style-type: none"> ○ 生徒に自発的な興味と関心呼び起こし, 道徳的価値を把握する段階 <ul style="list-style-type: none"> ・ 資料を読み, 冷静で客観的な観察力によって問題を正確に見極め, 解決すべき課題を見つけさせる。 ・ 問題点が複数ある場合には, 重点を決めたり追究の順番を決めたりさせる。 ・ 様々な視点から, ねらいとする道徳的価値について考えさせる。

展開後半	考え議論する	○ 展開前半でねらいとした価値について考えることができるような、現実的な問題について考え・議論する段階 <ul style="list-style-type: none"> ・ 立場カードを利用することで、多面的・多角的な考えを引き出し、その考えについて議論させることで展開前半に考えた道德的価値について深めさせる。 ・ 学級全体で解決策について考え、議論させる。
終末	つなげる	○ 各教科や特別活動などとの関連を図り、生徒一人一人が、自らの道德的な成長や明日への課題などを実感でき確かめることができる段階 <ul style="list-style-type: none"> ・ ねらいの根底にある道德的価値を一層主体的に考えさせられるような、説話を行う。 ・ 授業で考えた道德的価値について自分との関わりも含めて内省させ、他者の考えと比較しながら自らの経験などを組み合わせさせ、新たな道德的価値を振り返りシートに記入させる。

3.3. 「能動性」を発揮させるための問題解決的な学習における発問の工夫

学習指導要領では、発問の工夫について、「教師による発問は、生徒が自分との関わりで道德的価値を理解したり、自己を見つめたり、物事を多面的・多角的に考えたりするための思考や話し合いを深める重要な鍵になる。発問によって生徒の問題意識や疑問などが生み出され、多様な感じ方や考え方が引き出される。そのためにも、①生徒の思考を予想し、それに沿った発問や、②考える必然性、切実感のある発問、③自由な思考を促す発問、④物事を多面的・多角的に考えたりする発問を心掛けることが大事である。」(下線と番号は筆者による加筆)と述べられている。そこで、上述の4つの視点で問題解決的な学習における発問を次の表3のように工夫することとした。

【表3 問題解決的な学習における基本的な発問例】

過程		基本的な発問例
導入	意識化	ねらいとする道德的価値への方向付けをさせる発問 「○○(道德的価値)とはどういうことだと思いますか」① 「あなたにとって○○(道德的価値)とは何ですか」①
展開	道德的問題の把握	生徒に自発的な興味と関心と呼び起こさせ、道德的問題を把握させる発問 「この主人公の問題点は何でしょうか」② 「この主人公と自分が似ているなど感じたところがありますか」② 「ここでの問題は何ですか」③
	道德的問題の解決	道德的問題を解決するための解決策を出し、吟味させる発問 「この場面で主人公はどのようにしたらよいのでしょうか」② 「自分ならどうするのでしょうか」② 「どんな考えとどんな考えが対立しているのでしょうか」③
	考え議論する	学級全体で解決策について考え、議論させる発問 「あなたはそうされてもよいのですか」② 「どうしてそう考えたのですか」③ 「どの考え方が最もよい解決方法でしょうか」④ 「常に、誰が相手でもそのようにしますか」④ 「このような場面ではどう考えますか」④
終末	つなげる	各教科や領域、総合的な学習の時間などとの関連を図り、生徒一人一人が、自らの道德的な成長や明日への課題などを実感でき、確かめることができる発問 「○○(道德的価値)とはどういうことだと思いますか」④ 「あなたにとって○○(道德的価値)とは何ですか」④ 「今回のこの考え方をどのような場面で生かしていけそうですか」④

以上のような発問を基本とした問題解決的な授業を展開していくことによって、生徒は道德

的価値について多面的・多角的に考え、主体的に選択し実践することができると考えられる。また、このような学習を継続して実践していくことによって、新たな価値を創造し、よりよく生きていくための資質・能力を養うことを育んでいきたい。

4.1. 「独自性」を発揮させるためのICEモデルを用いたルーブリックによる評価の工夫

道徳科において創造的に考える力や考えようとする態度を見取るために、前述のICEモデルを用いたルーブリック（文章による評価基準）を表4のように作成し、個々の学習状況をより具体的な姿として見取ることとした。

【表4 道徳科におけるICEモデルを用いたルーブリック】

	Iを達成している段階	Cを達成している段階	Eを達成している段階
ルーブリック	本時で取り扱う内容項目の価値について気付くことができる。	本時で取り扱う内容項目の価値について多面的・多角的に考え、判断することができる。	道徳的価値に基づいて内省し、深まった価値を行動に移そうとしている。

このようにルーブリックを用いて評価するためには、後述してある振り返りシートを活用することが大切になってくると考える。表5は1年生資料名「ある日のバターボックス（出典：あかつき1年）」内容項目（公正，公平，社会正義）における実際のルーブリックである。

【表5 公正，公平，社会正義におけるルーブリック】

	Iを達成している段階	Cを達成している段階	Eを達成している段階
ルーブリック	公平，公正について自分なりの考えをもつことができる。	立場カードを使って議論したり、友達の意見を踏まえて考えたりすることによって、自らが捉えていた公平，公正の考えを多面的・多角的に捉えることができる。	振り返りシートを使ってこれまでの経験を踏まえて内省し、深まった価値を伴った行動をとろうとしている。

4.2. 「独自性」を発揮させるための振り返りシートの工夫

本研究では、生徒の学習の過程や成果などの記録や作品を計画的にファイル等に集積したものを活用して生徒の学習状況を把握するポートフォリオ評価によって、生徒が学んだ軌跡を見取っていきたいと考えた。そこで、用いるポートフォリオを「振り返りシート」として名付けて、道徳の時間に配付する各時間のワークシートとは別に作成した。なお、この「振り返りシート」は、22の内容項目毎に3年間を見通して編成してある。このシートを使うことによって、生徒が道徳の時間に学習した内容項目を、これまでの自分はどのように捉えていたか内省するとともに、その考えを基に新たな考えを書き、学びを深めることができることをめざしている。

また、道徳教育は、学校のあらゆる教育活動を通じて行われるべきものであり、学習指導要領にも「各教科等と道徳科の指導との関連をもたせた学習指導が大切である。各教科等にはそれぞれ目標と内容があり、それらの特質を踏まえ、道徳科の指導と関連する部分を明らかにす

ることが必要である。」と明記されている。そこで、振り返りシートにも、各教科との関連も明記することで、生徒が内省する際に関連する他教科の学習も想起しながら書くことができるようにした。また、別葉を作成し、授業者が道徳の授業を行う際に、本時の内容項目が、どの教科のどのような単元と関連があるか、どのような特別活動や総合的な学習の時間と関連があるかを把握することができるようにした。(図1)

C-18 国際理解, 国際貢献		教科との関連			
資料名『 』月 日		国語		保健	
		国語1 10月 玄關扉		保健3 2月 体育理論「国際的なスポーツ大会とその役割」	
		国語2 10月 漢詩の世界		英語	
		国語3 10月 論語		英語1 4月 PROGRAM 1 アルファベット	
		社会		英語1 7月 PROGRAM 5 国際フードフェスティバル	
		社会1 4月 世界の家		英語1 1月 PROGRAM 10 Mike's Visit to Washington, D.C.	
		社会1 6月 世界各地の人々の生活と環境		英語2 1月 Program 7 If You Wish to See a Change	
		社会1 9月 世界の諸地域		英語3 4月 Unit 0 Countries around the World	
		社会1 11月 世界のさまざまな地域の調査		英語3 5月 Presentation 1 日本文化紹介	
		社会1 6月 古代までの日本		英語3 6月 Unit 3 Fair Trade Event	
		社会2 6月 近世の日本		音楽	
		社会2 2月 開国と近代日本の歩み		音楽1 12月 アジアの諸民族の音楽	
		社会3 4月 二度の世界大戦と日本		音楽2 10月 サンタ ルチア	
		社会3 5月 現代の日本と世界		音楽3 5月 橋れゾレントへ	
		社会3 7月 現代社会と私たちの生活		音楽3 9月 フィンランディア	
		社会3 1月 地球社会と私たち		音楽3 10月 ブルタバ(セルダウ)	
		数学		音楽3 1月 世界の諸民族の音楽	
		数学1 7月 方程式			
		数学1 12月 空間図形の基礎			
		数学2 10月 図形の合同			
		数学3 4月 因数分解			
		数学3 2月 三平方の定理の利用			
		特別活動との関連		総合的な学習との関連	
		学行2 11月 修学旅行		総合1 5月 鹿児島・台湾遠征学習	
				総合2 11月 世界から見た日本探究学習	
資料名『 』月 日					
資料名『 』月 日					

図1 振り返りシートの一部

4.3. 「独自性」を発揮させるための立場カードの工夫

本校がこれまで研究してきた「創造的に考える力」を高めるためには、創造的な活動（「手かきを見いだす活動」、「考えを拡げる活動」、「よりよいものへとまとめる活動」）に、2人以上の生徒が互いに知識・技能や経験を補ったり、組み合わせたりする協働の視点を加えればよいと考えた。そこで、考え・議論する道徳を展開していく中で、生徒に多面的・多角的な見方・考え方をさせるためには、まず自らの考えを表出させることが重要である。次に、様々な角度から問題を解決していくためには、それぞれがもっている立場から発言することや、自分にはない友達の見方からの考えなどに触れさせることが重要であると考えた。意見を述べる際に、自分の立場を明確にして発表させることによって、自分の考えがより明確になったり、聞き手はどのような視点で考えたのかを理解しやすくなったりすることが期待できる。また、問題解決のために、より多様な立場に立ち、見方・考え方を拡げる必要がある場合には、発表者が資料の中に登場する様々な人物の立場で考えるようにさせる。このようにして生徒に、次項の写真のように自分の立場をはっきりさせて考え、議論させることによって、他の意見と比較しながら、自分の立場での考えを組み合わせ、新たな価値をもった考えを創造することができることをめざしていき

い。



5. 成果と課題

5.1. 成果

- 問題解決的な学習指導過程を作成し、取り扱う読み物資料を、どのような指導過程で行えば良いかを考えることによって、より多面的・多角的な見方・考え方を促すことができた。
- 立場カードを用いて多面的・多角的な視点で道徳的価値を追究させることによって、考え、議論する授業が活性化し、価値の深まりを促すことができた。
- 22項目ごとの振り返りシートを活用させることによって、価値の追究を図るだけでなく、生徒が自ら内省するための材料となり、独自性を発揮させるための手立てになった。

5.2. 課題

- 道徳科においてもI C Eモデルを用いて創造的な学びについての評価は行うことができたが、今後、道徳科の評価についても研究を進めていく必要がある。
- 22項目ごとの振り返りシートをより一層効果的に活用していくためには、各教科、領域、特別活動と道徳科の関連をまとめた別葉を有効に使い、内省する際に関連付けて考えることができるように各教科との連携を図る必要がある。

【参考文献】

- 鹿児島大学教育学部附属中学校（2013～2016）よりよい未来を創る生徒の育成（1～4年次）、鹿児島大学教育学部附属中学校研究冊子
- 文部科学省（2008）「中学校学習指導要領解説 道徳編」
- 文部科学省（2016）「中学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編」
- 文部科学省（2016）「学習評価に関する資料」